

令和 4 年 6 月 5 日現在

機関番号：11501

研究種目：挑戦的研究(萌芽)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K21738

研究課題名(和文)女性学長はなぜ増えないのかー日本の構造的特質と将来展望の探索ー

研究課題名(英文)Why aren't more women university presidents?

研究代表者

河野 銀子(Kawano, Ginko)

山形大学・地域教育文化学部・教授

研究者番号：10282196

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、女性学長がきわめて少ない日本の大学の現状を踏まえ、統計分析や国際比較、文献調査やインタビュー調査を通して、その背景を探った。学長(女性/男性)の基本的な属性やキャリアパスの諸特徴、女性学長の選出背景や仕事ぶり等が明らかになった。

さらに、日本の女性学長らの講演を中心とする国内シンポジウムと米国・英国・中国からゲストを招いた国際シンポジウムを、オンラインで開催し、女性学長・リーダーを育成していく方法やネットワーク形成に関する示唆を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本では、大学における女性管理職の増加は政策的課題になっているにもかかわらず、女性学長の実態を体系的に解明した研究は皆無であった。また、そもそも大学の学長研究自体が比較的最近始まったばかりである。女性学長を研究対象とし多角的に捉えた本研究は、このような状況を打開した点で学術的意義がある。

国内外のシンポジウムを通して、女性学長が少ない実態や背景、また解決の糸口を社会に向けて発信し好評を得たことから、社会的波及効果があったと考えられる。

研究成果の概要(英文)：This study explored the background of Japan's unusually low number of women university presidents through a statistical analysis, international comparisons, literature review, and interviews. We identified the basic attributes of women and men university presidents, the diverse aspects of their career paths, and the selection backgrounds and work styles of women presidents.

Furthermore, in the fall of 2021, we organized a domestic symposium to present our findings and to host lectures by women presidents of Japanese universities. In January 2022, we also held an international symposium with guests from the U.S., the U.K., and China, where we received suggestions on how to foster women university presidents and leaders, as well as network formation.

研究分野：教育社会学、ジェンダー研究

キーワード：女性学長 国際比較 大学経営 高等教育 ジェンダー ダイバーシティ 育成システム リーダーシップ 国

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究を企図した背景として、研究開始当初の日本の女性学長の少なさと、女性学長を対象とした研究の少なさを挙げることができる。以下に詳細を示す。

日本の大学(四年制大学)では、学生や教員に占める女性割合が上昇し、女性学長も増えてきたが(1998年:37名(6.2%) 2018年:85名(11.3%))、欧米と比べると少ない(例えば、米国の女性学長割合は約30%:<http://www.aceacps.org/>)。国立大学に限れば、初の女性学長が誕生した1997年(奈良女子大学)以降、女性学長割合は2~3%のままである。社会のさまざまな分野の人材を輩出する大学において、そのリーダー層が男性に偏っていることは問題であり、その要因を探る研究は急務と思われた。

日本でも、大学管理職に占める女性割合の数値目標公表が各大学に義務付けられる(女性活躍推進法)など、女性管理職を増やす政策的取組みが開始されたが、実態を体系的に解明した研究は皆無であった。女性学長をめぐる研究蓄積がある欧米(e.g., Morley, Louise, 2012, David, Miriam, 2014)と違って、女性学長をめぐる研究が未開拓であることから、女性学長が選出され、活躍していく個別の事例や、女性リーダー間の交流やネットワークの実態を丹念に検討する探索的な研究から着手することが求められていた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、大学の女性学長・リーダーを生み出す要因を探り、日本の特質を踏まえた将来展望を見出すことにある。上述したように、日本の大学は女性学長が1割程度しかいない。大学はさまざまな分野の人材を育てる場であり、また知の創造・伝達を担う大学が女性活躍やダイバーシティの推進など社会の価値転換を先導する意味は大きいにもかかわらず、学長等のリーダー層に女性が少ない現状は問題である。

こうした問題状況を踏まえ、本研究で次のような5点を明らかにすることを目的とした。

(1)女性学長の実態(戦後日本の女性学長数の変化と諸外国との比較)、(2)学長(女性/男性)のキャリアパス、(3)女性学長(経験者含む)のキャリア形成や学長としての選出過程、仕事ぶり、(4)女性学長自身が考える学長の育成方法、(5)海外の女性学長の育成やネットワーク形成。

3. 研究の方法

本研究は、上述した目的を果たすため、研究代表者と4名の研究分担者が協力して3年間で取り組んだ。

まず、学長選考方法等の大学政策の設置形態別の特徴、男女共同参画政策や科学技術・学術政策における女性学長の位置づけ等を確認し、5項目について以下のような方法で分析した。

- (1)女性学長の実態(戦後日本の女性学長数の変化と諸外国との比較)
 - ・女性学長の量的変化(文科省「学校基本調査」等)の分析
 - ・欧米等の女性学長・リーダー層の数的把握
- (2)学長(女性/男性)のキャリアパス
 - ・学長の初職、学長就任直前職等の経歴分析(文科省高等教育局『大学一覧』等)
 - ・女子大学の役割
- (3)女性学長(経験者含む)のキャリア形成や学長としての選出過程、仕事ぶり
 - ・女性学長15名に対する半構造化インタビュー
- (4)「どうすれば女性学長が増えるか」に対する女性学長自身の考え
 - ・(3)のインタビュー調査
 - ・国内シンポジウムに登壇した7名の女性学長の講演内容
- (5)海外の女性学長の育成やネットワーク形成
 - ・国際シンポジウムのゲスト(米国・英国・中国)の講演内容

以上は、関連する先行研究の文献調査も並行しながら進めた。なお、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により当初計画から変更したのは二点である。一点目は、インタビュー調査の方法で、途中から対面ではなくオンラインによる実施に変更した。二点目は、最終年度に予定していた海外の学会での発表に替え、オンラインによる国際シンポジウムを開催した。この前段階として、二日間の国内シンポジウムも開催し、社会的還元に努めた。

4. 研究成果

(1)女性学長の実態(戦後日本の女性学長数の変化と諸外国との比較)

・女性学長の量的変化(文科省「学校基本調査」等)の分析

「学校基本調査」(文部科学省2021)によれば、2021年の女性学長は103人(13.2%)で過去最高となったが、依然として1割強である。しかも、戦後から一貫して女性学長が存在したのは私立大学のみで、公立大学では1990年、国立大学では1997年になるまで女性学長は不在であった(図1)。このように、女性学長誕生の時期には設置形態による大きな差があることがわかつ

た。そこで、本研究では、女性学長の輩出やキャリア形成を検討するにあたり、私立・公立・国立という設置形態にも着目することとした。

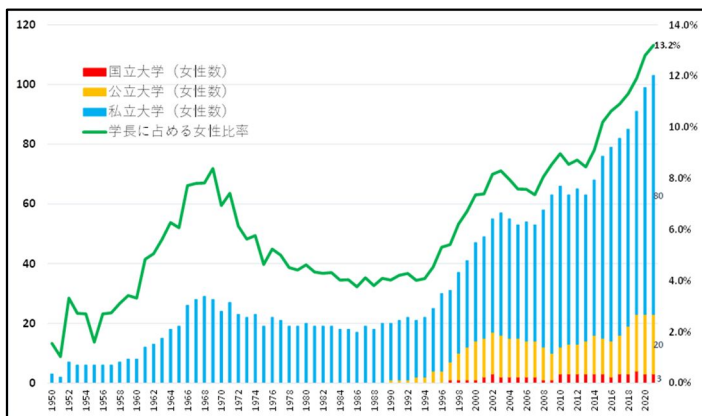


図1 女性学長の人数と割合

出所) 文科省「学校基本調査」(各年度)より河野作成

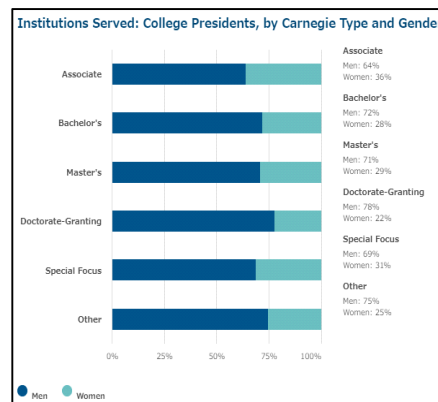


図2 米国の大学の女性学長割合(2017年)

出所) American Council for Education(ACE)

<https://www.aceacps.org/women-presidents/>

・欧米等の女性学長・リーダー層の数的把握

米国では、博士課程を持つ大学では女性割合がやや低い(22%)が、全体では約3割となる(図2)。また、女性学長の所属は州立大学が58%(男性51%)と私立大学を上回る。さらに、1970年前後まで男女共学化が進まなかったアイビーリーグなどでも女性学長が輩出されている(高橋2021, Howard & Gagliardi 2018)。

欧州(EU28)では、国による差が大きいものの高等教育機関の長に占める女性割合のEU28平均は23.7%(2019年)で、日本の平均より約10ポイント高い。

中国では、2014年時点の国全体の女性学長比率が11.4%と現在の日本よりやや低い、最も威信の高い985工程選定の重点大学でも10.9%の女性学長が存在しており(Yu & Wang 2018)、日本とは諸相が異なっている。

(2) 学長(女性/男性)のキャリアパス

統計的データについて

本研究で使用したデータは文部科学省高等教育局の『令和元年度 大学一覧』(2020)掲載の大学791校(国立大学86校、公立大学93校、私立大学612校)である。悉皆調査とし、性別、設置形態別に分析した。

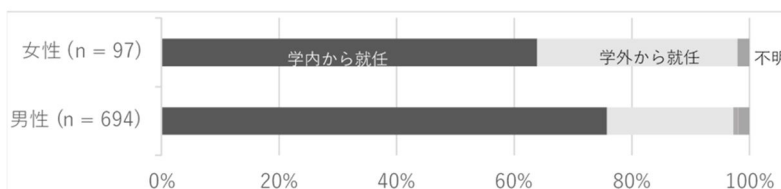
学長の初職(女性/男性)

(表1)によれば、女性学長では初職が「大学」「研究所」などのアカデミック・キャリアを合算すると49.4%であるのに対して、男性学長では68.6%である。一方で、主に大学外の経歴を示す「その他」は女性学長の23.7%に対して男性学長では7.6%と、ノンアカデミック・キャリアは女性学長に多く、初期キャリアにおいて性別で大きく異なっていることがわかった。

(表1)	大学	研究所	病院	企業	行政	その他	不明	計
女性学長(n=97)	45.3%	4.1%	15.5%	3.1%	3.1%	23.7%	5.2%	100%
男性学長(n=694)	65.0%	3.6%	4.8%	10.3%	3.5%	7.6%	5.2%	100%

学長の就任パターン(女性/男性)

次に学長が内部昇格によって選出されるか、あるいは外部招聘かを調べた。



(図3) 学長の就任パターン(女性/男性)

(図3)によれば、女性学長の63.9%、男性学長の75.8%が学内からの選出であり、全体として学内からの就任が多いが、特に男性学長にその割合が高いことがわかる。

学長就任直前職(設置形態別)

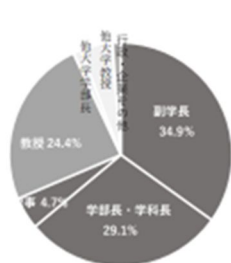


図4 国立大学

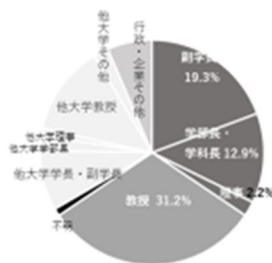


図5 公立大学

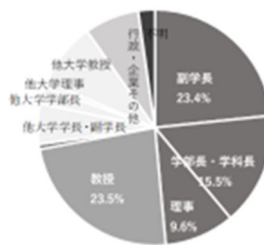


図6 私立大学

学長就任直前職を設置形態別に調べた。(図4,5,6)によれば,国立大学では、学長の90%以上が現大学(円グラフ白字)から選出され、そのうち直前職が「副学長」は34.9%、「学部長・学科長」は29.1%である。公立大学は他大学(円グラフ黒字)から就任した比率が比較的高い。なお、私立大学では系列大学・短大の学長も現大学に含めた。

女子大学の役割

日本では2020年現在で、全国に女子大学(国公立)は76校あるが、そのうち女性学長は22名で28.9%であり、米国の女子大学の女性学長比率(90.9%)に比べればかなり低いといえる。

女子大学の女性学長のキャリアとしては、22名のうち8名(36.4%)が外国で学位(修士 and/or 博士、Ph.D.)を取得しているが、男性学長では56名のうち9名(16.1%)であった。

因みに、本調査の量的分析対象者の全女性学長(共学大学・女子大学)97名の出身大学(大学院を含む)を調べてみると、そのうちの33名(34.0%)が女子大学出身者であり、彼女らの出身大学は、お茶の水女子大学や日本女子大学などの伝統的女子大学が多く、広く女子大学のみならず共学大学にも学長を送り出していることから、女子大学の人材育成機能が示唆された。

(3) 女性学長(経験者含む)のキャリア形成や学長としての選出過程、仕事ぶり

2019年12月から2021年2月にかけて現役の女性学長14名、経験者1名、計15名を対象に半構造化インタビュー調査の手法を用いて、一人に1~1.5時間で実施した。その結果、主に以下の点が明らかとなった。

女性学長のリーダーシップ

インタビューから女性学長のリーダーシップに コミュニケーションをうまく図ること、スピード感をもって決断すること、 バランス感覚をもち、総合的に物事を判断すること、 夢を語り、ビジョンを語ること、 人材を見抜く力を大事にすること、 女性のみならず、外国籍の方なども含めダイバーシティ重視、インクルーシブ・リーダーシップを大事にしていることは共通点として見られた。

上記の特徴は男性学長も備えている場合があるし、また男性の学長の中でも人によって異なっているということも考えられる。しかし、これまでの研究を踏まえ、あえて言うなら、女性学長はコミュニケーション重視、多様性重視という特徴がより顕著にみられるのではないかと考えられる。それは男性中心の社会で、彼女たち自身はマイノリティーの立場の経験を有しているし、また海外の経験者が多いことから、コミュニケーションや多様性の大切さに対してより深い理解があるのではないかとと思われる。

女性学長のキャリアの特徴

多様なキャリア 女性学長のこれまでのキャリア、とりわけ、学長・副学長になる前の経験をみると、母校出身者や長期勤続がある者でかつ学科長、学部長、副学長などを経験するといった男性学長に似た典型的なキャリアパスをもつ学長もいたし、他大学での学長経験者もいたが、男性と異なる非典型的なパターンが目立ち、かなり多様であることが分かる。学長・副学長の直前のキャリアにおいては、大学の部局長等の管理職ではないもののリーダーとしての役割を果たしてきた経験も含まれる。実はこのような非典型的なキャリアは女性のワークライフバランスに関わる事情に由来する側面があることも判明した。

留学経験 本研究のインタビュー対象者15名のうち12名が海外経験を有しており、この実体験は彼女たちのキャリアにおいて大きな意味を持っていると考えられる。前述の女性学長のコミュニケーション重視や多様性重視というリーダーシップにみる特徴は、人によってはこの海外体験に少なからず関わっているのではないかと考えられる。

大学を取り巻く環境と女性学長の誕生

インタビューから女性学長は大学を取り巻く環境が危機的な状況に陥ったり、あるいは大学構成員が危機意識を強く持っている背景で登場したケースが多いことが分かった。

大学で不祥事があった場合、法人と教学の機能分担をめぐる対立や組織の分裂が生じていた

場合、学生募集にかかる危機感が共有されていた場合、また予算削減に伴う教職員数削減による雑務の増加で教職員が疲弊していた場合、さらにいつ廃校しても不思議ではないという危機的な状況にあった場合等の事例が語られた。他方、当面危機的な状況ではないものの、例えば女子大学なのに式典で壇上に上がるのは男性一色の状況に対する違和感をもち、教職員中で大学を変えていこうという意識がある程度共有されている状況であったり、危機に備え、短大に4年制大学の教育課程の設置を計画し適任者を探していた状況であったり、また経営不振の過去を経験し、人事を刷新しようとするなど、大学の執行部や構成員の間で強い危機意識を有しているという状況下で女性学長が誕生するという一つの背景が語られた。

女性学長が選出された際の経緯や背景から、危機的な状況の下で、あるいは危機だと先見的に大学構成員がキャッチできた大学に従来と異なる形でリーダーが誕生しやすいと考えられる。

(4) 「どうすれば女性学長が増えるか」に対する女性学長自身の考え

インタビュー調査および国内シンポジウムにおける女性学長7名の講演内容を通して、「どうすれば女性学長が増えるか」について次の6点にまとめることができた。

学長の候補となりうる女性教員の育成、女性の教授を増やすこと、女性の大学院進学者を増やすこと、アライ(特に男性)を増やすこと、さまざまなレベルでの女性同士のネットワーク構築、女性学長に関する研究や日本の大学のダイバーシティが進んでいない問題があることを社会に発信すること。本研究は、 に対して大きく貢献したと思われる。

(5) 海外の女性学長の育成やネットワーク形成

2022年1月22日、日英中の女性大学リーダーの育成やネットワーク形成に詳しい海外スピーカーを招いてオンライン国際シンポジウムを開いた。国際シンポの主要な目的は、海外の大学の女性リーダーシップ育成について歴史的な経緯や現状を踏まえて日本の大学の将来を展望することであった。

米国からはミルドレッド・ガルシア米国州立大学協会(AASCU)会長、シンシア・マトソン テキサス A&M 大学サントニオ校学長が、米国州立大学を中心とした女性学長の出現と増加の背景として、社会的な公正(social justice)や平等な機会の提供(equal opportunity)、育成のためのキャリアパスやパイプラインとしての訓練やメンターシップ、ロールモデルとなることを含めた女性学長としての役割について紹介し、議論を行った。米国において、女性学長の問題が、有色の人びとやアドミニストレーターからの登用など、マイノリティー、非エスタブリッシュメントの代表性的問題と深くかかわっていることが明らかにされた。

英国からは、産業界の立場から女性大学リーダー育成に尽力してきたノーマ・ジャーボ(OBE: 大英帝国騎士団勲章) WomenCount 代表)が、英国の大学リーダーにおける女性進出が、英国社会全体の女性リーダーの育成・進出と深いかかわりを持って進んできた経緯を示唆した。

中国からは、周丽娜(シュウ・リナ)中国伝媒大学准教授が、同大学が主導してきた世界女性学長フォーラムの活動を紹介し、変化を生み出す上で国際的ネットワークの形成と活用が果たす役割の大きさを示唆した。

いずれのスピーカーからも日本の女性学長とその育成に対する連帯のメッセージが寄せられ、日本の女性学長をとりまく現状と課題が、国際的な普遍性を持つイシューであることが明らかになった。

以上の研究成果は『女性学長はどうすれば増えるか』(東信堂)にまとめ、2022年6月に刊行される。

<引用文献>

American Council for Education(ACE) (<https://www.aceacps.org/women-presidents/>).

Howard, Elizabeth and Gagliardi, Jonathan, 2018. Leading the Way to Parity: Preparation, Persistence, and the Role of Women Presidents. Washington D.C.: American Council on Education.

文部科学省、学校基本調査(各年度)。

文部科学省高等教育局、2020、『令和元年度 大学一覧』。

高橋裕子、2021、「高等教育界における女性リーダー：女性学長を輩出する働きかけ」明石紀雄監修、大類久恵、落合明子、赤尾千波編『現代アメリカ社会を知るための63章：2020年代』明石書店。

Yu, Kai and Wang, Yinhan, 2018, The Making of Female University Presidents in China, Singapore: Springer.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計15件（うち査読付論文 7件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 Keiko Sasaki	4. 巻 vol.50 no.4
2. 論文標題 The Formation of Japanese Women's Adult Education after the Second World War	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 History of Education	6. 最初と最後の頁 567-585
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/0046760X.2021.1906956	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Keiko Sasaki, Yuri Uchiyama, Sayaka Nakagomi	4. 巻 7(2)
2. 論文標題 Study Abroad and the Transnational Experience of Japanese Women from 1860s-1920s: Four Stages of Female Study Abroad, Sumi Miyakawa and Tano Jodai	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Espacio, Tiempo y Educacion	6. 最初と最後の頁 5, 28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14516/ete.322	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 佐々木啓子	4. 巻 33(1)
2. 論文標題 女性医師のパイオニア、岡見京と吉岡彌生 海外留学による医師資格取得と、機関養成としての女医学校設立	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 電気通信大学紀要	6. 最初と最後の頁 26, 35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18952/00009823	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 高橋裕子	4. 巻 第9号
2. 論文標題 「大学職員」という用語をめぐる一考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 大学職員論叢	6. 最初と最後の頁 1-2
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋裕子	4. 巻 No.624・10月号
2. 論文標題 逆境を、創造を灯す光に。	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 IDE 現代の高等教育	6. 最初と最後の頁 2-3
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐々木啓子	4. 巻 32(1)
2. 論文標題 戦前期女子留学者の渡航目的および派遣機関の動向について：高等教育機会と専門職位の獲得を求めて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 電気通信大学紀要	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18952/00009424	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高橋裕子	4. 巻 534
2. 論文標題 私の私学考「津田梅子研究と私 『建学の精神』を中心に」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 私学経営	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋裕子	4. 巻 -
2. 論文標題 津田梅子と新五千円券	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ファイナンス	6. 最初と最後の頁 1-1
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋裕子	4. 巻 616
2. 論文標題 世界大学ランキングをめぐる課題 私大連が行ったアンケート調査からー	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 IDE 現代の高等教育	6. 最初と最後の頁 64-67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋裕子	4. 巻 419
2. 論文標題 世界に学び、日本の近代を拓いた新紙幣の肖像	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京人	6. 最初と最後の頁 16-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋裕子	4. 巻 539
2. 論文標題 セブシスターズにおけるトランスジェンダー学生の入学許可論争と新たなアドミッションポリシー (前編: ウェルズリー大学を中心に)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 私学経営	6. 最初と最後の頁 38-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋裕子	4. 巻 540
2. 論文標題 セブシスターズにおけるトランスジェンダー学生の入学許可論争と新たなアドミッションポリシー (後編: 公表された新たなアドミッションポリシーと学生支援のあり方)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 私学経営	6. 最初と最後の頁 29-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yonezawa Akiyoshi	4. 巻 18
2. 論文標題 Challenges of the Japanese higher education Amidst population decline and globalization	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Globalisation, Societies and Education	6. 最初と最後の頁 43-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/14767724.2019.1690085	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Akiyoshi Yonezawa, Christopher D. Hammond, Thomas Brotherhood, Miwako Kitamura & Fumi Kitagawa	4. 巻 42(2)
2. 論文標題 Evolutions in knowledge production policy and practice in Japan: a case study of an interdisciplinary research institute for disaster science	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of Higher Education Policy and Management	6. 最初と最後の頁 230-244
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/1360080X.2019.1701850	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 木村育恵, 跡部千慧, 河野銀子, 他	4. 巻 70(1)
2. 論文標題 教員育成スタンダード化政策の課題 女性教員のキャリア形成に着目して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 北海道教育大学紀要(教育科学編)	6. 最初と最後の頁 53-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計26件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 8件)

1. 発表者名 Keiko Sasaki
2. 発表標題 The Female Presidents of Women's Colleges: Changed the Social Structure of Japan
3. 学会等名 International Standing Conference for the History of Education (ISCHE 42) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Keiko Sasaki
2. 発表標題 Memories of Bryn Mawr College Days and the Philanthropist Society: A case study of three female presidents of women's colleges in Japan
3. 学会等名 History of Education Society 53th Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 河野銀子, 米澤彰純, 佐々木啓子, 黄梅英, 高橋裕子
2. 発表標題 女性学長をめぐる日本の構造的特質-リーダーシップ育成のあり方を問う-
3. 学会等名 日本高等教育学会・第24回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高橋裕子
2. 発表標題 津田梅子はどのようにジェンダーギャップを乗り越えようとしたのか
3. 学会等名 令和3年ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(牽引型)シンポジウム『日本はなぜジェンダーギャップを埋められないのか』
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高橋裕子
2. 発表標題 女子大学の存在意義 ~国際交流における特長と課題~
3. 学会等名 JAFSAウェビナー DE&I (Diversity, Equity & Inclusion) シリーズ1
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Spelman College学長 Mary Schmidt Campbell × 高橋裕子（日本側カルコン委員）対談
2. 発表標題 カルコン第二部 セッション3 「コロナ禍が日米間の交流と教育に与えた影響」
3. 学会等名 カルコン（日米文化教育交流会議）第29回日米合同会議
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 飯野正子 高橋裕子 野口啓子 鼎談
2. 発表標題 変革を担う、女性であること - 津田塾大学と Bryn Mawr College の絆を通して考える 21 世紀における女子大学の意義 -
3. 学会等名 津田塾大学創立 120 周年記念シンポジウム
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yuko Takahashi
2. 発表標題 Umeko Tsuda's Contributions to Modern Japan: A Pioneering Woman Educator and Her Transnational Collaboration
3. 学会等名 シカゴ日米協会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 YONEZAWA Akiyoshi, KAWANO Ginko, SASAKI Keiko, HUANG Meying, TAKAHASHI Yuko,
2. 発表標題 Why are There so Few Women Presidents in Japan?
3. 学会等名 香港比較教育学会（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 河野銀子, 米澤彰純, 佐々木啓子, 黄梅英, 高橋裕子
2. 発表標題 女性学長のキャリアパス -日本の構造的特徴と将来展望の探索-
3. 学会等名 日本教育社会学会第72回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高橋裕子
2. 発表標題 高等教育における男女共同参画の現状とインクルーシブ・リーダーシップの可能性-Tsuda Vision2030と「変革を担う」女性リーダーの育成
3. 学会等名 大学基準協会 第7回学長セミナー
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大野英男, 三木義一, 高橋裕子, 村田治
2. 発表標題 新時代の大学を目指して行動できる学長とはーポストコロナを見据えてー
3. 学会等名 大学基準協会 第7回学長セミナー
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 佐々木啓子
2. 発表標題 戦前期女子海外留学・派遣の実態調査にみる女性リーダーたちの トランスナショナルな経験
3. 学会等名 ジェンダー史学会第17回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Keiko Sasaki
2. 発表標題 The Expansion of the Western Space in Japan(1859-) : Culture, Community, Class, and Gender in Girls' Mission Schools in Foreign Settlements and Japanese Cities.
3. 学会等名 International Standing Conference for the History of Education 41th Conference, at Port University in Portugal (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Keiko Sasaki
2. 発表標題 The Formation of Women's Adult Education after the Second World War in Japan : Activities of the female bureaucrats of the Ministry of Labour, Women and Youth Bureau
3. 学会等名 History of Education Society 52th conference, at University College London, ICHRE. IoE.in UK. (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高橋裕子
2. 発表標題 セブンスターズにおけるトランスジェンダー学生の受け入れと女子大学の使命
3. 学会等名 津田ウェルネス・ネットワーク
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yuko Takahashi
2. 発表標題 Umeko Tsuda and Her Travels in the United States and England Right Before Founding Tsuda College
3. 学会等名 World Education Research Association 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高橋裕子
2. 発表標題 ビジョナリーとしての津田梅子 - 女性の社会参画にかけた夢
3. 学会等名 小平市女性のつどい創立40周年記念講演会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高橋裕子
2. 発表標題 座談会:女性学長が語る大学の未来~男女共同参画の視点から~
3. 学会等名 日本学術会議・全国ダイバーシティネットワーク「学術の未来とジェンダー平等~大学・学協会の男女共同参画推進を目指して~」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高橋裕子
2. 発表標題 <人作り>にかけた夢 女性リーダーの育成と津田梅子
3. 学会等名 青山高校同窓会第14回研究交流会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高橋裕子
2. 発表標題 『変革を担う女性であること』課題解決能力の高い女性リーダーの養成について
3. 学会等名 川崎商工会議所商業部会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yuko Takahashi
2. 発表標題 Tsuda Vision 2030 and Inclusive Leadership Research
3. 学会等名 APU 20th Anniversary 17th Asia Pacific Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高橋裕子
2. 発表標題 男女共同参画で拓く新時代 津田梅子の生涯
3. 学会等名 大野城市主催(内閣府「地域における男女共同参画推進を支援するためのアドバイザー派遣事業」)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高橋裕子
2. 発表標題 高等教育における女性のリーダーシップ 津田梅子の後継者育成に学ぶ
3. 学会等名 第3回琉大未来共創フォーラム
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Yuko Takahashi
2. 発表標題 University's Responsibility and Social Engagement in Rethinking Comprehensive Internationalization
3. 学会等名 2020 AIEA(Association of International Education Administrators) Annual Conference 2020 (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 河野銀子
2. 発表標題 高等教育はどこへ向かうのか～教育政策とジェンダー～
3. 学会等名 国際婦人年連絡会2019年度第4回セミナー
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 高橋裕子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 196-200
3. 書名 明石紀雄監修 大類久恵・落合明子・赤尾千波編著『現代アメリカ社会を知るための63章 2020年代』	

1. 著者名 高橋裕子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 211-215
3. 書名 明石紀雄監修 大類久恵・落合明子・赤尾千波編著『現代アメリカ社会を知るための63章 2020年代』	

1. 著者名 高橋裕子, 米澤彰純, 河野銀子, 佐々木啓子, 黄梅英, 他	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東信堂	5. 総ページ数 -
3. 書名 女性学長はどうすれば増えるのか	

1. 著者名 高橋裕子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 朝日新聞出版	5. 総ページ数 288
3. 書名 大庭みな子著『津田梅子』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	高橋 裕子 (TAKAHASHI Yuko) (70226900)	津田塾大学・学芸学部・教授 (32642)	
研究分担者	米澤 彰純 (YONEZAWA Akiyoshi) (70251428)	東北大学・国際戦略室・教授 (11301)	
研究分担者	佐々木 啓子 (Sasaki Keiko) (70406346)	電気通信大学・大学院情報理工学研究所・名誉教授 (12612)	
研究分担者	黄 梅英 (HUANG Meiyang) (30458228)	尚綱学院大学・総合人間科学系・教授 (31311)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 国際シンポジウムー女性学長の育成とネットワーク	開催年 2022年～2022年
-----------------------------------	--------------------

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
米国	米国州立大学協会	テキサスAM大学サントニオ校		
英国	WomenCount			
中国	中国伝媒大学			